

ガンディーと英語

——一つのインド、一つの言語——

鈴木 義 里

1. はじめに

日本では、とうとう2011年から小学校で英語が必修化されることになった。確かに、英語は現在最も有力な言語であり、世界標準の言語であるかのような振舞いをしている。英語によって得られる情報が、日本語で得られる情報とは比べものにならないほど豊かであるというのも事実だろう。理科系の分野では、英語論文以外は評価されないとも言われている。

だが、世界を相手にして、日夜ひたすら戦わなくてはいけない人びとの数は、ごく限られているということも事実だろう。日本では、普通の生活を送るために、英語は必要ない。日本人が英語をいくら学んでも身につかないのは、何も英語教育のせいばかりではあるまい。英語ができなくても日常生活に何の不自由も感じない社会において、英語ができるようにならないのは当然のことなのだ。

これに対して、英語ができないと日々の生活においても不利益を被る社会というのもある。イギリスの植民地だった地域では、支配者の言語である英語ができるかできないかは、決定的だった。そして、その植民地支配の長い影は、今もインドを覆っている。英語ができるごく少数のエリートと、それ以外の、英語のできない普通の人びとという構図は、イギリスがインドに残した置きみやげである。

英語は、日本とは違う意味で、インド社会に重くのしかかっている。植民地支配を通じてもたらされたこの言語をどうするのかという問題は、独立後の憲法制定議会で熱い議論が戦わされ、結果として、憲法では英語を1965年以降には公的な場面から消し去るということに決まった。しかし、英語はインドから立ち去りはしなかった。憲法の条文は変更せずに、公用語に関する法律を作って、ほぼ永久に英語に公的な資格を与えてしまった¹⁾。

独立運動を開始した人びとはイギリスに留学したエリートたちだった。後に政党となるインド国民会議 (Indian National Congress) を作ったメンバーは、いずれもイギリスに留学していた人びとだった²⁾。彼らは帰国しても、英語でコミュニケーションをとり、イギリス風の生活をしてきた。彼らのような、独立運動の第一世代とも言うべき人びとと、ガンディーの間には、へだたりがある。ガンディーは彼らほどには富裕でなかったし、彼らほどの学歴もなかった。

本稿の目的は、マハートマ (偉大なる精神=聖人) と呼ばれた、ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi³⁾ 1869～1948) という人物が、英語とインドの土着の諸言語をどのように考えていたのかを、彼の言説を追うことで明らかにすることである。ガンディーは、思想家というよりは実践の人であった。彼は「どこまでも行動の人であり、独り塵界を離れて書齋にこもり、静かに思索と執筆

活動に従事する学者や思想家とは本質的に異なっていた⁴⁾。したがって、その著作の多くは、それぞれの時局において述べられたものが多い。資料としては英語版の全 100 巻からなる全集を用いた。ガーンディーは英語でも書いたが、母語であるグジャラーティー語、後に身につけたヒンディー語、ウルドゥー語でも書いている。全集では、他の言語で書かれたものも英語に翻訳して収録されている。

2. インドにおける英語

イギリスがインドにやって来るまで、インドではペルシャ語が公用語の地位を占めていた。ムガル朝の公用語がペルシャ語だったからだ。もちろん、イギリスがインドにやって来たとき、ムガル朝の支配が遍くインド亜大陸を覆っていたわけではない。だから、ムガルの支配の及ばぬ地域においては、ペルシャ語ではなく、土着の言語が公用語として機能していた。また、ムガルの支配地記でも、普通の人びとにとつてペルシャ語は母語ではなかったため、人びとはそれぞれの地域の言語を話していた。

そのような状況の中で、イギリスはインドを統治するために、植民地の土着の人間とコミュニケーションをはかる必要があった。圧倒的に少数の人間が、圧倒的に多数の人間を支配するためには、当然のことながら多数派の人間の言語を知らなくてはならない。植民地支配を機能させるためには、現地の言語を知ることが必須の条件であると言える。だが、イギリス人たちがインド亜大陸に足を踏み入れた時点で、彼らの現地の言語に関する知識は、極めて貧弱なものだった。

そこで、頼りにするのは通訳ということになるが、イギリス人とほとんど没交渉だった土地において、通訳を見つけることは非常に難しかった⁵⁾。東インド会社はもともとは、貿易と通商として出発した組織であり、インドを政治的に支配するためのものではなかった。したがって、当初、現地インドで、英語を普及させようという施策は採られていなかった。それが性格を変えたのは、1757 年のブラッシーの戦いに勝利して、ベンガル地方の事実上の支配権を得てからだった。現地での言語に関しては、インドの土着語を擁護する立場（オリエンタリスト Orientalist）と英語の導入を図るべきだとする立場（アングリシスト Anglicist）との間で、論争が 18 世紀末から 19 世紀はじめにかけて起こった。前者はウィリアム・ジョーンズ（William Jones 1746-94）の「サンスクリットの発見」（1789 年）などを背景として起こったインドの伝統文化の再評価という面もあった。

最終的に、この論争は初代インド総督ベンティンク（William Henry Cavendish Bentinck 1774-1839）によって終止符を打たれた。法務担当相マコーレー（Thomas Babington Macaulay 1800-59）は 1835 年二に「教育に関する覚書」（Macaulay's Minute on Education）を提出した。それは、インド人の民衆に教育をすることは不可能であるが「血と色はインド人で、趣味、考え方、道徳、知性においては英国人である階級を作り出す⁶⁾」という方針のもと、現地人のエリートに英語を教えることが必要であるとしたものである。それを受けてベンティンクは、英語による高等教育を行うという「決議（Resolution）」を発表した。その結果、行政・政治といった統治機構においてインドの土着の言語は古典語も含めて没落していくことになった。この政策は、古典的な教育方法による遅れを痛感していたインド人知識層の要求と呼応する部分が

あったことは事実である。たとえば、しばしば引用される、ローイ (Ram Mohan Roy 1774-1833) がアマスト卿当てに書いた手紙には、英語の導入を希望したのはインド人であるとしてある。しかし、彼の要求は英語を学習することであって、教育言語を英語にせよということではなかったし、サンスクリットやペルシャ語の価値を否定したものでもなかった⁷⁾。伝統的な教育方法では、ヨーロッパの新しい科学技術に対等に伍していけないという、焦燥にも似た意識であった⁸⁾。

かくして、「19世紀中葉以降、あらゆる分野において英語の排他的優越が打ち立てられてゆくことになったのである。それは換言すれば、英語を解する一群のインド人を創出し、彼らをもってイギリス支配を確立する枠組みができ上がったことを意味していた⁹⁾」。

英語がこのような位置を占めるにしたがって、インド人のエリートの中からインド高等文官 (Indian Civil Service) 試験に合格するインド人が登場するようになった。インド高等文官は、イギリスのインド統治において重要な役割を果たした職で、当初はインド人には門戸が開かれていなかった。インド人の最初の合格者は、ベンガルの詩人ラビンドラナート・タゴールの兄、サティエンドラナート・タゴールであった。それは、ガンディーが生まれる6年前の1863年のことであった。高等文官試験は、当時はロンドンのみで行われたため、インド人の受験者は、イギリスに渡航せねばならない上に、15歳で留学して4、5年イギリスで勉強しなくてはならなかった。ガンディーが登場するのは、このような、英語を自由に操りイギリスに対して憧れを持つインド人エリートたちが力をもち始めた頃だった。

3. ガンディーの生い立ち

3.1 前史：インドに戻るまで

1869年10月2日、モーハンダース・カラムチャンド・ガンディーは、インド西北部のグジャラート、カーティヤール地方のポールバンダル（「白い港」の意）に生まれた。ガンディー家は、モード・パニヤーというカーストに属している。「モード」は地名に由来し、「パニヤー」は、サンスクリットでいう「ヴァイシャ」であり、商業を生業とするカーストである。ヒンドゥー教の4ヴァルナの中では、上から三番目（バラモン、クシャトリヤに次ぐ）にすぎず、必ずしもステイタスが高かったとは言えない。「ガンディー」とは、「香辛料を商う人」意味している¹⁰⁾。もっとも、M・K・ガンディーの祖父も、父も地元の藩王国のディーワーンであったから、まったく名家でなかったということではもちろんない。田中敏雄によれば、ディーワーンとは「民事事件の調停、地租徴収、国境線画定、治水工事の監督を職務とする役職名」であり、普通「宰相」という訳語が当てられているが、イメージとしては「家老職」というのが「日本史の文脈では最も近い」という¹¹⁾。

ガンディーは地元ポールバンダルの小学校に入学したが、父の異動に伴い、ラージコートの小学校に移った。そして、その地のハイスクールに入学している。ハイスクールの4年生まではグジャラティー語で授業が行われていた。4年生からは大部分の科目は英語で行われた¹²⁾。そこでは、ペルシャ語とサンスクリットも学んだようである。1887年には大学入学資格 (matriculation) に合格し、シャーマルダー

ス・カレッジに入学したが、学力不足で授業が理解できず、1学期でラージコートの自宅に戻っている。『自叙伝』では英訳版も含めて、単に学力不足としか述べられていないが、「田舎都市（まち）のハイスクール出身者には講義に使用される英語が理解できず」ということもあっただろう¹³⁾。ガンディーの家庭では、英語を解する者はおらず、家の中でも英語が飛び交っているというような状況ではなかった。

ガンディーがラージコートにいたとき、父の旧友で一家の相談役だったバラモン（バラモン）の勧めで、父のディーワーン職を継ぐためには、イギリスに留学して弁護士資格を取るのがよいということになった。1888年9月4日、ボンベイから船でイギリスへと向かった。二等船室の乗客は、同行したマジュムダールという知りあい以外は、すべてイギリス人で、ガンディーは彼らのことばが理解できなかった。2ヶ月弱の船旅でようやくイギリスに到着したのは10月27日だった。ロンドンでは、イギリス紳士になろうと努力し、雄弁術、フランス語、バイオリン、ダンスなどを習った。留学時代の写真を見ると、スーツを着て、いかにもイギリスに同化したインド人といった雰囲気（雰囲気）が漂っている。このとき、ガンディーは London Diary というものを英語で書いている¹⁴⁾。

ロンドンで過ごした3年間の中で、彼は厳密な菜食主義者になった。また、留学してから1年ほどして、神智主義者 (Theosophist) と出会い、『ギーター』をサンスクリット語で読むことになった。インド本国では、それほど熱心にサンスクリット語を学ばなかったガンディーが、イギリスに行つて、異文化の中で自らのアイデンティティを「発見」したと言ってもよいかもしれない。彼の心には、イギリスに対するあこがれと反発の両者が同居していたと考えてよいだろう。異国で生活すると、急に自らの生まれ育った地域のことを意識し、その礼賛者となる例は、古今東西しばしば目撃されることである。ガンディーの場合は、もともとヒन्दゥー教に対する宗教心の強い母親の影響を強く受けていたこともあり、インドを意識する心は、普通の人よりも強かったかもしれない。

1890年6月11日、弁護士 (barrister) 資格を取得し、高等法院に登録し、翌日、帰国の途についた。モンスーンで荒れる海を渡り、ボンベイに着いたのは7月7日だった。ボンベイで弁護士を開業しようとしたのだが、仕事はなかなか見つからなかった。ようやく法廷に立ったものの、弁護はまったくうまくいかなかった。失意の中で、ガンディーはボンベイからラージコートに帰つて事務所を開いた。しかし、そこでも仕事は順調とは言えなかった。南アフリカ在住のインド人ムスリムから民事訴訟の依頼が舞い込んだのは、そのときだった。1893年4月、ガンディーは家族をラージコートに残してナタールへと向かった。

1850年代に、英領南アフリカは英領インドと協定を結び、砂糖、コーヒー、茶などのプランテーションのために、インドからの年季労働者を受け入れ始めていた。5年の年季契約でやってきた人びとは一律に「クーリー (苦力)」と呼ばれて差別されていた。当時の南アフリカには、ナタール共和国 (1838年)、トランスヴァール共和国 (1852年)、オレンジ自由国 (1854年) の三つのボーア人の国が成立していた (「ボーア」とは、オランダ語で「農民」の意で、17世紀に入植したオランダ人のことである)。イギリスもナタールとケープに直轄領をもっていた。ガンディーが白人による有色人種に対する差別のために、列車から引きずりおろされるということがあったのは、このときである。

南アフリカに渡った当初は、それほど長い滞在をするつもりはなかったのだが、基本的な人権を剥奪されているインド人コミュニティの改善のために奮闘しているうちに、22年の歳月が流れてしまった。ガンディーは1893年の5月にダーバンに到着して以来、その後何度か一時的にインドに戻ったりしたが、1915年1月にボンベイに戻るまでの長い間、南アフリカに滞在していたのである。その間、受動的抵抗 (Passive Resistance) という闘争方法を実践し、それを発展させてサットィヤーグラハ (Sattyagraha)¹⁵⁾ 普通、「真理の把持」と訳される) という考え方を生み出した。この間に英語に言及した演説・著作は多くはないが、皆無ではない。特に、『ヒンド・スワラージ (インドの自治)』(1909年) では、「何千何万何億の人々に英語教育をすることは、奴隷状態に陥れるようなものです」と明確に言い切っている点は注目に値する (『ヒンド・スワラージ』についてはあとで再度検討する)。『ヒンド・スワラージ』は、ロンドンに陳情に行った帰りの船の中で、船会社の便箋を用いて、10日間で一気に書かれたという。グジャラーティー語で3万語ほどのこの作品は、右手が疲れると左手を用いて書かれたと言われており、草稿の筆跡が複数あるという。

3.2 インドに戻ってから

1915年にインドに戻ってからは、アフマダーバード郊外にサットィヤーグラハ・アーシュラムというのを作った。集団生活を行いながら精神的な日々を送る修道場 (アーシュラム) を作るという方法は、南アフリカでの「実験」がもとになっている。南アフリカでは有名だったガンディーもインドでは、それほど知られた存在ではなかった。1917年のピハールでの藍 (インディゴ) 栽培のプランテーションでの闘争、1918年のアフマダーバードでの繊維労働者の闘争を指導することを通じて、彼はインドでも知られるようになっていった。

ガンディーが政治の表舞台に登場したのは、1919年のローラット法¹⁶⁾ に対する反対運動においてだった。ローラット法は、逮捕状なしの逮捕、裁判手続きなしの投獄などを定めた、インドの独立運動を弾圧するための治安維持法だった。この悪法の内容が発表されると、それに反対して、ガンディーは全インド的なサットィヤーグラハを組織した。非暴力的な闘争を組織したガンディーの運動は、4月13日に行われたイギリス軍による大量虐殺 (いわゆる「ジャリヤーンワラー・バグの虐殺 (Jallianwala Bagh Massacre)」) を契機にして暴力的な運動へと発展した。あくまで非暴力的な不服従運動を主張していたガンディーは、この暴力的な状況を前に、「ヒマラヤ的誤算 (Himalayan Blunder あるいは、後に回想して Himalayan Miscalculation)」と述べ、4月18日に運動の中止を宣言し、贖罪のため3日間の断食に入った。その年の12月に虐殺の地、アムリトサルで行われたインド国民会議の年次大会で、ガンディーはその場に蝟集した人びとによって「ガンディー万歳 (Gandhi ki jai)」の声で迎えられた。

そのころ、トルコのカリフ (イスラームの国家最高主権者) を廃止するという政策をとったイギリスに対して、インドのムスリムの間では「カリフ擁護 (ヒラーファト)」運動が起こっていた。ガンディーは、第1回ヒラーファト大会に参加し、そこで初めて「非協力」という戦術を思いついたという。1921年には外国製綿布のボイコットを開始した。しかし、1922年2月、現在のウツタル・プラデーシのチョウリ・

チョウラで群衆による暴力事件が発生した。その事件に衝撃を受けたガンディーは、運動が高揚している中で、非協力運動の中止を宣言した。運動が退潮の兆しを見せ始めた3月、ガンディーは逮捕された。その結果、禁固6年という判決を受け、ヤラワダー（イエラヴァダーとも表記される Yeravda）中央刑務所に収監された。1924年、虫垂炎の手術を受けるためにプネーの病院に移送された。病気が快復する前に、6年の刑期を待たず無条件釈放されることになった。

1925年からの5年間、ガンディーは政治の場から離れていた。また、独立運動も混迷の時期を迎えていた。1919年インド統治法により、10年以内にインドに責任政府を任命するかどうかを決定するための調査委員会を派遣することになっていた。1927年に委員を派遣することになったが、インドではその委員会に対する反対が盛り上がった。インド総督アーウィンはインドに自治領の地位（dominion status）を与えること、インド統治法の改革のために円卓会議をロンドンで開催することを宣言した。それに対して、インド国民会議派は、自治領ではなく完全独立（Purna Swaraj）と非暴力的な不服従運動をガンディーの指導の下に行うことを決定した。1930年1月、国民会議派は「独立の誓い」を採択し、第二次サッティヤグラハ運動が開始された。3月にはガンディーによる「塩の行進」が開始された。塩税法をやぶって、自分たちで塩をつくるため、アフマダーバード近郊のアーシュラムから、390キロメートルほど離れたダンディー海岸まで、ガンディーは行進した。61歳であった。4月、ガンディーらの一行はダンディー海岸に到着し、実際に塩を作った。5月にガンディーは逮捕されプネーのヤラワダー中央刑務所に収監された。しかし、ガンディーの逮捕後も、運動が沈静化することはなかった。

イギリス側は、事態解決のため、円卓会議を召集したが、会議派はボイコットした。インド総督アーウィンは、1931年になってやむなくガンディーを釈放して会談を行った。家庭で消費する塩の製造許可、非暴力政治犯の釈放、酒・外国布販売店へのビケットの許可という条件で、会議派側は、不服従運動の停止し円卓会議への参加を受け入れるということでガンディー・アーウィン協約が結ばれた。9月からの円卓会議にガンディーは出席したが、得られるものはなかった。12月に帰国すると、ネールーらが逮捕されるというニュースが彼を待っていた。のみならず、ガンディー自身も帰国の一週間後（1932年1月4日）には逮捕され、再びヤラワダー（イエラヴァダー）中央刑務所に収監されてしまった。

1932年8月、イギリス首相マクドナルドが選挙制度に「コミューナル裁定」を下した。それは、カーストに属するヒンドゥー教徒とその外側に置かれた不可触民を、別の選挙区にするというものであった。それに抗議してガンディーは獄中で断食を開始したが、会議派の指導者と不可触民の指導者アンベードカル(Bhimrao Ramji Ambedkar 1891-1956)がプネーで会合を行い、プネー協定が結ばれた。ガンディーは不可触民の問題の重大性を強く意識し、彼らを「ハリジャン（神の子）」と呼び、その解放と農村再建に専心することを決意した。

1933年半ば以降、大衆運動は下火になっていき、ガンディーも運動の中心からは離れていった。サーバルマティー・アーシュラムを不可触民解放のための中心とすべく、ハリジャン・アーシュラムと改名した。また、1934年には中央インドの奥地ワルダにセーワグラーム・アーシュラムを開設した。ガンディーはインド各地を遊説し、不可触民の解放のための活動を行った。ところが、ヒンドゥー教徒の一部から爆

弾を投げつけられるなどということもあった。ガンディーは、民衆の疲労を知り、不服従運動の停止を指令し、国民会議派から引退する声明を発表した（1934年9月）。

3.3 独立を前にして

ガンディーが次に独立運動の前面に登場するのは、1939年、ドイツ軍がポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発してからだった。ガンディーは連合国側を支持していたが、「非暴力的なもの」に限るという条件のもとにおけるものだった。ネールーもイギリスが帝国主義を捨てれば連合国側を支持すると明言していた。ガンディーは大衆的な不服従運動ではなく、「選ばれた個人による」不服従運動（サツティヤーグラハ）を開始した（1940年10月）。国民会議派全国委員会は、7月に完全独立と民族政府樹立を求める決議を採択していた。

1941年になると日本が参戦した。緒戦において日本軍は、香港、フィリピン、インドネシア、マラヤを占領し、イギリスのアジア最大の基地、シンガポールを陥落させた。さらにその勢いは続き、ラングーンを占領した。マレーでは、日本軍に投降したイギリス軍のインド兵がインド国民軍（Indian National Army）を組織していた。インド国民軍は、チャンドラ・ボース（Subhas Chandra Bose 1897-1945）が司令官だったということもあり、1942年には5万人の勢力を集めたと言われている。イギリス政府は危機感を募らせ、1942年3月、クリップス使節団をインドに派遣し、インド側各派の指導者と会談を試みたが、結局決裂した。8月8日深夜、会議派はイギリスに対して、「インドから出て行け（Quit India）」の運動の開始を決議した。翌朝、イギリスは弾圧を開始し、ガンディー、ネールー、アーザードラをはじめとする会議派の主な指導者たちを一斉検挙し、会議派自体も非合法団体にした。

ガンディーは高齢であることが配慮されて、ヤラワダー中央監獄ではなく、プネー郊外のアーガー・カーン・パレスに隔離され、1944年5月に釈放された。1945年8月、第二次世界大戦が集結を迎えたが、インド国内は騒乱の渦中にあった。1946年3月、ムスリム連盟はムスリム国家（後にパーキスタンへと発展する）の樹立を決議し、8月16日を「直接行動の日」と定めた。カルカッタ（現コルカタ）では、ヒンドゥー・ムスリムの間で大量虐殺・放火・婦女暴行・掠奪・誘拐が行われ、4日間続いた騒乱の結果、死者5,000人、負傷者15,000人、家を失った者は10万人に及んだ。騒乱はベンガル一帯、ビハール、連合州、ボンベイへと拡がっていき、全インドがコミューナル暴動の嵐にさらされることになった。

東ベンガルのノーアーカーリーでも、人口の80パーセントを占めるムスリムが、少数派のヒンドゥー教徒を襲うという暴動があった。それを聞いて、ガンディーは11月にその地へと出発した。ガンディーは村々を歩いて村人を説得し、ようやく沈静化した。ガンディーはこのとき、すでに77歳になっていた。1947年8月14日にはパーキスタンがイギリスの連邦の自治領として独立し、8月15日には同じく自治領としてインドも独立した。ガンディーは、独立記念の式典には参加せず、カルカッタのスラム街でヒンドゥー・ムスリムの融和を求めて奮闘していた。彼は最後までインド・パーキスタンの分離独立に反対していたのだ。ガンディーが憂慮した通り、インド側からはムスリムがパーキスタン側に、また、逆にパーキスタン側からはヒンドゥー教徒とシク教徒がインド側に大移動を行った。その

総数は1200万にとも言われ、道中で双方に掠奪・婦女暴行・強制改宗などあらゆる残虐行為が連鎖的に繰り返された¹⁷⁾。この憎悪と殺戮を目の当たりにして、デリー市民への抗議としてガンディーは1948年1月13日から5日間の断食に入った。1月30日午後5時過ぎ、夕べの祈りに参加するため滞在していたビルラー邸の庭園にある礼拝場に向かうところで、ヒンドゥー至上主義団体に所属する、ナートウーラム・ヴィナーヤク・ゴードセーという若者が発射した銃弾によりガンディーは死去した。最後に発したことばは「へー・ラーマ（おお、神よ）」だった。

4. ガンディーの言語観と英語

4.1 ガンディーの著作

全100巻の『ガンディー全集』（英語版のほかに、ヒンディー語版とグジャラーティー語版がある）には、ガンディーのすべての著作が収められているが、その多くはスピーチの原稿や、書簡である。書籍としては、『自叙伝』（1927年-29年）、『南アフリカのサッティヤグラハの歴史』（1928年）、『インド・スワラージ（インドの自治）』（1909年）が、代表的なものである。この三冊はいずれも、もともとグジャラーティー語で書かれたものである。そして、そのいずれもが英語に訳されており、その結果として、彼の考えが世界の人びとに認められる結果となったという点は、押さえておく必要がある。別の言語が支配者の言語として君臨する中で、その言語とは異なる母語の重要性を訴えるために、支配者の言語を用いざるをえないというジレンマから逃れることは難しい。

以下では英語版の『ガンディー全集』に収録されているものを中心に、ガンディーの英語とインドの土着の諸言語に関する考えをほぼ時代順に見ていく。ガンディーの母語はグジャラーティー語であり、グジャラーティー語によるものが最も多いようにみえるが、それ以外にもヒンディー語、ウルドゥー語で発表されたと明記されているものもある。グジャラーティー語はヒンディー語と言語系統が同じで、文法的にもかなり共通する点があり、語彙に関しては類推のきくものも多い。ただし、文字については、類似点があるとはいえ、ヒンディー語で用いられているデーヴァナーガリー文字とは印象がかなり異なっている。単語の切れ目を示す文字の上部に引かれる横の線がない点が、顕著な違いである。ヒンディー語でも、急いで書くと、時としてこの線が省略される場合もあるので、気にならないとも言える。

ガンディーは、自らの意見を発表する媒体として、次のような雑誌を発刊している。

- (1) 『インディアン・オピニオン (*Indian Opinion*)』(1903年～)：4頁の週刊新聞。グジャラーティー語、タミル語、ヒンディー語、そして英語で発行されたようだが、ガンディー自身はおそらくグジャラーティー語で書いたものと思われる。
- (2) 『ナヴァジーヴァン (*Navajivan*)』(1919年～)：グジャラーティー語による週刊新聞。
- (3) 『ヤング・インディア (*Young India*)』(1919年～)：『ナヴァジーヴァン』の英語版。
- (4) 『ハリジャン (*Harijan*)』(1933年～)：「ハリジャン」とは「神の子」という意で、不可触民のことを指す。ガンディーは不可触民の解放の重要性を痛感して、『ヤング・インディア』の紙

名をこのように変更した。グジャラーティー語、ヒンディー語、ウルドゥー語、英語で刊行されている。

これら4紙に掲載されたものはすべて全集に取められている。全集編集者、K. スワミーナタンは、こう述べている。「ガンディーが偉人だということは早くから分っていたので、彼の言行はすべて記録され保存されました。客との会話を弟子たちがそれぞれ記録することもありました。ガンディーはその記録を見て、一番よいと思ったものを選び、訂正してから自分の週刊新聞、インディアン・オピニオン、ヤング・インディア、ナヴァジーヴァン、ハリジャンのどれかに載せました¹⁸⁾」。

4.2 南アフリカと『ヒンド・スワラージ』

後述するように、ガンディーはヒンディー語¹⁹⁾を「国語 (national language)²⁰⁾」とすべきだと主張しており、自身もヒンディー語を学んでいる。カルカッタ（現在コルカタと表記されるが出版時点の表記に従う）の出版社から出ている実用的なヒンディー語のテキスト²¹⁾には、「国語の問題 (The Question of a National Language)」という文章が引用されており、手書きの実例の見本として示されているガンディーの筆跡を見ると、グジャラーティー文字と同様単語の上の横線を書いていない。

ガンディーの英語に関する言及として、最も古いものの一つとしては、1909年1月30日付の『ヤング・インディア』紙の「無防備な中における英語の影響」がある。そこでは次のような主張がなされている。

……インド人の若者の中には生かじりの英語を身につけ、必要がないのに英語を使っている者がいる。まるで自分の言語を忘れたか、あるいは英語を身につけることがいかに難しいかを示そうとしているかのようだ。内輪話でも、純粋なグジャラーティー語やヒンディー語、ウルドゥー語ではなく、怪しげな英語 (broken English) を用いている。(中略) 自分たちを大切にす民族ならどんな民族でも自分たちの言語を愛し、その言語に誇りをもたねばならない。(中略)

だが、これは、英語を学ばなくてよいということや、無関心でよいということの意味するのではない。英語は政府の言語であり、国際的な言語になっており、だれもが学ぶ必要がある。(中略) 自分の母語を相手が理解しない場合に限って英語を使うというのが、英語に対する正しい対処方法だろう。英語は学ぶべきだが、自分の母語は無視してはならない。英語を学ぶことは、母語を学ぶことの次になされるべきである。あるいは、上の原則に従った上で、同時に両言語を学ぶという方法もありうるかもしれない。

これは、スワデーシの一貫として述べられたものである。想定されている読者はグジャラーティー語を母語とする南アフリカ在住の人びとである。この同じ年(1909年)にガンディーはロンドンに陳情にでかけているが、ロンドンで10月5日に行われた、グジャラート出身者たちの集会でスピーチを行っている(グジャラーティー語)。それを原稿の形にした『インディアン・オピニオン』では、「英語の方がグジャラーティー語よりも正しく書けるし、話せるといった高い教育を受けたインド人」に対して、それは

「われわれの恥である」と述べている（1909年11月20日付）。そして、このスピーチの中ではもう一つ注目すべきことを述べている。「インドの人間は、一つの言語をもつ必要があり、おそらく将来そのようになるだろう。誰もがそのような言語を一つのインドの言語と認めるだろう」というものだ。インド人には、共通の言語が必要だという主張は、ここで初めて述べられたものである。それがヒンディー語であるとはまだ述べていないが、「一つのインド、一つの言語」という思想をここに見ることができる。

ガンディーが陳情のためにケープタウンを出航してイギリスへ向かったのは、6月21日だった。先に見た『インディアン・オピニオン』は1月30日付であり、南アフリカにいた当時のものである。したがって、英語に対する否定的な考えがより強くなり、民族の共通言語という考え方が形を成し始めたのは、イギリス滞在中と見てよいだろう。この考えがより明確に示されているのは、イギリスからの帰途の船中で著した『ヒンド・スワラージ』（出版は1910年）である。この中では、機械文明に対する批判とともに、識字よりもまず道德教育の重要であることなどが述べられているが、英語教育に対しては激しい呪詛のことが見られる。

……マコーリ²²⁾が固めた教育の土台は、実をいうと奴隷の土台でした。マコーリがそのように考えて、宣言を起草したとはいいません。しかしマコーリがしたことの結果はまさにそうになりました。私たちが他人のことで自治を語っているとは、なんとという貧困でしょうか！（中略）私たちの最上の思想を伝える手段は英語ですし、私たちの国民会議は英語で運用されています。私たちのよい新聞は英語で。もしこのような状態が長期にわたって続くと、後の世代は私たちを軽蔑するでしょうし、私たちの魂に呪いをかける、と私は信じています。

あなたは理解しなければならないのですが、英語教育を受け入れて、私たちは国民を奴隷にしたのです。偽善、憎悪、暴虐などが増しました。英語教育を受けた人は、ためらわずに人びとを騙し、困らせました。

（田中敏雄訳『真の独立への道（ヒンド・スワラージ）』126－7頁）

……英語を学んだ人の子供には、まず道德を教え、母語を教え、インドのもう一つの言語を教えなければなりません。子供が成長したら、英語教育を受けてもかまいません。それもただ英語を除くためにです。英語でお金を稼ぐためではありません。

（同上128頁）

さらに、人びとは「英語教育を受けることなしに、用が足せる時代ではないと思込んでいる」が、そんなことはないと述べている（128頁）。また、全インドに共通の一言語という思想も明言されている。しかも、それはヒンディー語であると言い切っている。

……全インドに必要な言語は、ヒンディー語でなければなりません。ヒンディー語をウルドゥー文

字やナーガリー文字で書いてもよいとしなければなりません。ヒンドゥー教徒、イスラーム教徒の関係がよいものであるように、この二つの文字を多くのインド人が知る必要があります。このようになると、私たちが互いに接するときに、英語を追い払えるでしょう。

(同上 128 頁)

全インドに共通の言語をという発想は、どこから出てきたのだろうか。同書の中では、ウェールズの言語復興運動に言及しており、先に引用した「無防備な中における英語の影響」の中で、ポーア人がオランダ語を、ユダヤ人がイディッシュを愛していると述べていることなどから考えると、この間に、「一民族一言語」という考え方にふれる機会があったのかもしれない。もちろん、スワデーシという考え方の帰結として、「デーシ（自分の国）のことば」が浮上してきたのだとも考えられる。

ガンディーがこの時点で、ヒンディー語をどの程度理解したのかは、はっきりしないが、1916年2月16日の「カーシー・ナーガリー・ブラチャリニー・サバー（カーシー [ベナレス] ナーガリー文字普及会議）でのスピーチ」の中で、「みなさんの前で、うまくヒンディー語が話せないことを恥ずかしく思います。後存知のように、私は南アフリカに長いこと住んでおりました。私がヒンディー語を少しばかり学んだのは、そこでインドの同胞たちと仕事をしたときのことなのです。ですから、どうか私の失敗をお許しください」という弁解をしている（全集ではヒンディー語から英語に訳されている）。単に日常会話ができるというレベルではなく、自分の考えを述べる力があったと見てよいだろう。

このように、ガンディーは英語に対して、極めて否定的な見解をもつに至っており、この時期の演説では、聴衆がグジャラートの人びとの場合はグジャラーティー語で、ヒンディー語地域の人びとが聴衆の場合は、ヒンディー語を使っている。

英語に関する言及のあるものだけを拾ってみても、次のようなスピーチなどが、ヒンディー語で行われている。

・「古代と現代の教育に関するアラーハーバードでのスピーチ」（1916年12月23日）。

・「全インド共通文字、共通言語会議、ラクナウ」（1916年12月29日）。

このラクナウでの会議では、議長としての演説もヒンディー語で行っており、また、インタビューもヒンディー語で受け答えしている。

・「ヒンディー語を話すことについて」（1917年5月28日、複数の新聞社に送った投稿）。

もちろん、英語を使わざるをえない場面が少なくなかった。たとえば、ベナレス・ヒンドゥー大学の開校式のスピーチ（1916年2月6日）は、英語で行われた。インド総督や藩王と王妃、著名人が居並ぶ中で、内容としては土着の言語での教育を訴えるものであったし、冒頭部分で「聖地にある大学で、自分の国の人間に外国語で演説をせざるをえないことは深い屈辱と恥辱であると言わざるをえない」と述べているものの、スピーチは英語でなされた。

4.3 「国語 (national language)」

「国語 (national language)」に関するガンディーの考えが、明確に示されたのは「第2回グジャラート教育会議におけるスピーチ」(1917年10月20日)というグジャラート語でなされたものである。全集の英訳で31頁になるかなり長いもので、特に教育言語 (medium of instruction—どの言語を用いて教育を行うかということ) に関することが中心的なテーマとなっている。

そこでは、「英語はわれわれの国語たりうるか?」という問題を設定して、「国語」の満たすべき要件として次の5つの観点を示している。

- ①政府の公務員に簡単に学べるものでなくてはならない。
- ②宗教、経済、政治に関して全インドの交流の手段として役立つものでなくてはならない。
- ③インド人の多数派の話しことば (speech) でなくてはならない。
- ④すべてのインド人にとって簡単に学べるものでなくてはならない。
- ⑤その言語を選ぶ際に、一時的な偶然の利益を考慮してはならない。

そして、英語はこれらの要件を満たしていないとしている。そして「これらの要件を満たす言語がヒンディー語であることを認めねばならない」と結んでいる。なお、ガンディーはこの時点では、「ウルドゥー文字」(ガンディーの用語。ペルシャ・アラビア文字のことである) で書かれたものも含めてヒンディー語と考えている。ヒンディー語とウルドゥー語は同じものだという見解や、多くのヒンドゥー教徒がデーヴァナーガリーではなく、ペルシャ・アラビア文字を使っているということも指摘している。

ガンディー自身の母語は、グジャラート語である。したがって、最も自由に自分の考えを表現できた言語がグジャラート語であることは疑いえない。しかし、語彙や文法の上での類似性が近いとはいえ、グジャラート地方の人びとに、ヒンディー語を「単一の国語」にするという考えを納得させることができたかどうかについては、疑問が残らないわけでもない。グジャラートの人びとの前でさえ、このようにヒンディー語の重要性を訴えていることから、当然とも言えるが、ヒンディー語を母語とする人びとの集会では、より強いことばでヒンディー語の重要性を訴えている。インドール (現在のマッディヤ・プラデーシュ州にある都市) で開かれた「ヒンディー文学会議(Hindi Sahitya Sammelan)」(1918年3月29日)のスピーチでは、次のように述べている (ヒンディー語。以下の訳文は、英語版全集から)。

私が嘆かわしく思うのは、ヒンディー語を母語とする地域においてですら、ヒンディー語の振興・普及への情熱をもっていないように見えることだ。この地域の教育ある人びとは、会話や手紙に英語を使い続けている。ある友人は手紙にこう書いてきた。われわれの新聞社の経営者は仕事をすべて英語で行っているし、帳簿も英語だ。フランスに住んでいる英国人は、あらゆる取引で自分たちの母語(英語)を使用している。われわれの最も重要な活動ですら英語で行っているとは、なんと嘆かわしいことだろう。もし、ヒンディー語に国語 (national language) の地位を与え、地方語 (provincial language) に生活上でふさわしい地位を与えないとしたら、独立 (Swaraj) に関する議論は無駄だという控えめだが確固たる意見を私はもっている。ヒンディー文学会議が、インドの直面しているこ

の重大な問題の解決のための手段となることを熱烈に希望するとともに、全能の神に祈っている。

当時のエリート層の間では、実際の仕事においてはもっぱら英語が使用されており、ヒンディー語には関心が払われていなかったという実態もよく分るスピーチである。同じスピーチの中で、「われわれの教育のある指導者たち」の中のある人びとは（会議派の指導層を念頭においたものか）、いまだに、英語を「国語（national language）」にしようと考えていると批判している。さらに、ヒンディー語そのものに関しても、英語で書かれたヒンディー語の文法書を越えるような文法書が書かれていない点について苦言を呈している。

さて、上の引用に示したように、当時ヒンディー語の普及活動が、不十分であったことは否めない。とくに、南部ドラヴィダ系の言語地域にあつては、インド・アーリア系のヒンディー語はそれほどたやすく習得できる言語ではない。ガーンディー自身はグジャラーティー語を母語としているためにヒンディー語を「やさしい」と感じたにちがいないが、それがそのままドラヴィダ系の言語（タミル語、カンナダ語、テルグ語、マラーヤラム語）を母語とする人びとも当てはまるとは考えにくい。ガーンディーは、マドライでの「サッティヤグラハ運動について」というスピーチで次のように述べている（1919年3月26日、日刊紙『ヒンドゥー』に発表。英語）。

……ヒンディー語は、たぶん世界で最も簡単に学べる言語です。私はタミル語について多少のことは知っています。タミル語はとても美しい言語で、音楽的です。けれども、その文法はマスターするのにとても難しいのです。それと比べると、ヒンディー語は赤ん坊の仕事に過ぎません。どうか、ヒンディー語を学ぶ機会をぜひ利用してください。

このスピーチの行われたマドライは、現在のタミル・ナドゥ州にある地域（当時の行政区分ではマドラス管区 [presidency]）なので、タミル語を母語とする人々を前に話したものと考えられる。ヒンディー語の文法が易しく、タミル語の文法が難しいというガーンディーの主張が、聴衆たちに共有されたとは考えにくい。1919年の年末に開かれたアムリトサル（現在のパンジャブ州の都市）で行われた会議派の第34回大会に関して、述べた『ヤング・インドア』（1920年1月7日、英語）の中では、タミル語話者への譲歩するものになっている。（なお、ほぼ同趣旨のものが、グジャラーティー語の『ナヴァジーヴァン』1月11日号にも掲載されているが、マドラス管区に関する部分は述べられていない）。

マドラスでの英語使用に関するガーンディーの主張を見る前に、この記事の他の部分を見ておこう。議長であったモーティラル・ネール（ジャワハルラル・ネールの父）の長い演説は、英語でなされた。15,000人にもなろうとしていた聴衆の7分の1はまったく理解できずに退屈していた。フルスキャップ紙（約43cm×34cm）の紙、38頁の原稿は、もし、全部を朗読したなら少なくとも3時間はかかりそうだったという（実際には飛ばして読んだのでそれほどはかからなかった）。そして、ヒンディー語でなされるべきであったし、ヒンドゥスターニー語（ここでは、「デーヴァナーガリーとウルドゥー文字で書かれた

で書かれたもの」との注記がある)で印刷されるべきであったとガンディーは述べている。なお、ここでもヒンディー語とヒンドゥスターニー語の両方の用語が、あまり明確な区別をすることなく使われている。さて、マドラス管区に関する部分を見てみよう。

……中央州、連合州、デリー、パンジャブ、ビハールではヒンドゥスターニー語だけが使用されており、マドラス管区を除く他の地域では、ヒンディー語が広く理解されている。というのは、ヒンディー語が他の地域の言語と同語族だからである。マドラスだけが困難があるから、その管区(マドラス管区)出身の数百人の代議員のために、英語は分らないがヒンディー語なら多かれ少なかれ理解できる何千もの代議員に、英語を強制するのは適切ではない。筋が通っていて経済的で、政治的にも健全な方法は、会議派の報告書を圧倒的に優勢なヒンドゥスターニー語で作ることである。ドラヴィダ系の会員は、自由に英語で話してもいいし、タミル語やテルグ語を用いてもかまわない。

ここでは、ガンディーは、インドのネーションの共通の言語として、ヒンディー語を用いるべきだとしているものの、マドラス管区の人びとには、英語を許容してもよいという考え方を示している。「国語 (national language)」という考え方を放棄したというわけではないとしても、現実的に英語の使用はやむをえないという状況にあるということであろう。引用した部分のすぐ後で、まだ数年は会議の言語として英語を使用することはやむを得ないものの、適切な政治的な教育がなされれば、「ヒンディー語だけで会議が行えることは明らかである」としている。さらに、マドラス管区の人びとも、全インド的な活動したいなら、ヒンディー語を身につけることは必須であるとまで述べている。丁寧にも、1日1時間学習すれば、1年でヒンディーが身につくと述べている。この話は1月21付の『ヤング・インディア』でも繰り返されている。さらにまた、これはエスカレートして、「1日3時間学習すればドラヴィダの土地の人びとでも3ヶ月で簡単に身につけられる」と繰り返して述べている(『ヤング・インディア』1927年1月20日、「ヒンディー対英語」)。おそらく、これはガンディー自身の経験に基づくものであり、信念となっていたのだろう。だが、ガンディーはドラヴィダ系の言語を母語としているわけではない。ガンディーの母語は、インド・アリア系のグジャラーティー語であり、この言語はヒンディー語とかなりの共通性があるので、ヒンディー語を学ぶことが容易だった。だが、自らの経験をそのままドラヴィダ系の言語を母語とする人びとの当てはめることには無理がある。

ガンディーは英語を排除することと共通の「われわれインド人」という点を強調するあまり、インドの多言語性については、必ずしも十分な配慮を行っていないように見える。共通の敵であるイギリスと戦うためには、「共通のわれわれ」という一枚岩の主体を仮構する必要があったためかもしれない。ガンディーのこの考えに沿うように、会議派は1920年12月26日～31日に開催された第35回大会(ナーグプル大会。ナーグプルは現マハーラーシュトラ州の都市)で、インド国民会議派の議事(proceedings)は、今後できるだけ「国語 (national language)」すなわちヒンディー語・ヒンドゥスターニー語によって行うものとする、という決議を採択した。P.D. タンドン (Purusottlam Das Tndon 1882-1962) によって

提案されたものである²³⁾。ただし、同じ大会で、多言語に配慮した新しい組織原理も導入している。「従来、会議派の地方組織をイギリスの行政区分に即して配置していたのに対して、別表の通り、新しく言語別に再配置することにしたのである²⁴⁾」。ガンディーも、「国語」と同時に「地方語」を認めてはいるものの、地方語の振興ということは構想の外にあるように見える。

表 インド国民会議派の州委員会と言語（1920年）

州 (province)	言語	現在の州・国家
マドラス	タミル語	タミル・ナードゥ
アーンドラ	テルグ語	アーンドラ・プラデーシ
カルナーティク	カンナダ語	カルナータカ
ケーララ	マラーヤラム語	ケーララ
ボンベイ市	マラーティー語／グジャラーティー語	マハーラーシトラ
マハーラーシトラ	マラーティー語	マハーラーシトラ
グジャラート	グジャラーティー語	グジャラート
スインド	スインディー語	インドとパーキスタン
連合州	ヒンドスターニー語	ウツタル・プラデーシ
パンジャープ	パンジャービー語	インドとパーキスタン
北西辺境州	ヒンドスターニー語	パーキスタン
デリー	ヒンドスターニー語	デリー
アジメール地	ヒンドスターニー語	ラージャスターン
中央州	ヒンドスターニー語	マディヤ・プラデーシ
中央州	マラーティー語	マハーラーシトラ
ベーラル	マラーティー語	マハーラーシトラ
ビハール	ヒンドスターニー語	ビハール
オリッサ	オリヤー語	オリッサ
ベンガル地	ベンガル語	インドとパーキスタン
アッサム	アッサム語	アッサム
ビルマ	ビルマ語	ミャンマー

[出典] 中村（1977年、83頁）

会議派のこの決定は、「大衆政党への脱皮という課題に対応すべく、インドの多言語構成という歴史的な現実を率直にうけとめ、それを独立運動の発展のための不可欠の条件にした²⁵⁾」と言ってよいだろう。

ガンディーはその後も、ヒンディー語あるいはヒンドゥスターニー語を、唯一の「国語 (national

language)」にすべきだとする考えを、さまざまな機会を通じて述べている。ただ、ドラヴィダ系の人びとだけでなく、ベンガル語を母語とする人たちにも「ヒンドウスターニー語を理解するのは困難 (with difficulty) である」と述べるようになった (『ヤング・インディア』1921年11月10日)。ベンガル地方で行った講演では、全インドではなく「ヴィンディヤ山脈より北の地域」の人びとにとっては、ヒンディー語を身につけることは易しいと、これまでとは少しニュアンスの違う言い方になっている。また、ベンガル語、グジャラーティー語、パンジャービー語という言語名を挙げて、それらは「地方語 (provincial language)」であり、それらの語だけを「母語」と呼ぶのは、やめようではないかと述べている。そして「母なる土地 (Motherland)²⁶⁾ の歌、パンデー・マータラム²⁷⁾ を歌うとき、われわれは全インドのために歌うのではないか」そのように、全インドの言語としてヒンディー語を用いるべきだと主張している (このときの使用言語は英語であったと思われる)。

ガンディーの「国語 (national language)」に対する強い志向は、ローラット法に対する反対運動が、非協力運動として盛り上がる中で、エリートでない普通の人びとの中に「われわれインド人」という意識が芽生えているとガンディーが感じたということを示しているのではないだろうか。人びとの一体感を中心に据えることが、最も中心的な課題であるとガンディーが考えていたことは明らかである。そして、そのためには、一体感をもてる言語、すなわち「国語 (national language)」が希求されたのである。

すでに見たように、1919年～22年のイギリスへの非協力運動が盛り上がる中で、チョウリ・チョウラ事件に衝撃を受け、ガンディーは運動の停止を宣言した。運動は後退局面を迎え、ガンディーは逮捕され、禁固6年の判決を受けた (実際には1924年に釈放された)。彼は、そのまま1930年代までは政治の表舞台からは遠ざかった。

この間に、ガンディーの「国語 (national language)」の考えは、より鮮明になった。『ガンディー全集』には「国語 (national language)」と題された文章が何本か収録されているが、その中の一つとして1927年2月10日に発表されたものがある (『ヤング・インディア』)。それは、英語日刊紙『ヒンドゥー』に掲載されたガンディーの意見を批判する文章に対する反論という形式をとったものだ。ガンディー批判の要点は、「もし英語がなかったら、今日のインドの政治活動は起こりえなかつただろう」ということと、「現時点でインドおよびビルマ (当時、ビルマもイギリスの植民地としてインドと一続きの地域とされていた) で最も広範に理解されているのは英語であるのに、それ以外にもう一言語 (ヒンドウスターニー語) を学べというのは、むしろ人びとの負担を増すものである」ということである。

それに対するガンディーの反論は次の通りである。まず、「英語はインドの総人口の1%にも満たない人びとにしか理解されていない」から、英語で語ったのでは大衆に届かない。それに対して「インドの総人口の60%以上人間は、日常の単純なヒンドウスターニー語 (ordinary rustic Hindustanai) を理解している」というものである。さらに「自分は英語の使用や学習を罵倒したことはない。英語を話すインド人がこれまで果たしてきた役割は誰も否定しないだろう。ただ、これからの政治運動が前進するためには、英語がむしろ障害になっている」とガンディーは考えているというのである。

英語とヒンドウスターニー語を理解する人びとの割合の根拠は示されていないが、確かに普通の人びと

の間では、ヒンドウスターニー語の方が、英語よりは理解されていたと考えられる。ただ、ガンディーの力点は、むしろ、指導層と大衆の間に乖離が起こることが危険だということにある。とはいえ、ヒンドウスターニー語がはたして大衆に届くことばなかのどうかという点は、別の問題である。とりわけ南インドでは、ヒンディー語が大衆に届くとは考えにくい。だから、ビルマでガンディーがヒンドウスターニー語で演説をしたことは、理解に苦しむ（1929年3月9日。その内容は英訳されて『ヤング・インディア』4月4日に掲載された）。

さらに、これはインド・アリア系の言語を母語とする人びとの間でも、異論があった。ナーグプル（インド中央部、インド・アリア系のマラーティー語地域）の学生を対象にして演説を行ったとき、ガンディーはヒンディー語から英語に切り替えざるをえなかった（『ガンディー全集』の編集者の注では「ガンディー・ジー²⁸⁾は演説をヒンディー語で開始したが、英語を使ってほしいという声があがり、英語に切り替えた」とある『ハリジャン』1933年11月17日。「ナーグプルでの学生集会でのスピーチ」）。南インドではなおさらで、アレッピー（南インド・トラヴァンコール藩王国、現ケーララ州、ドラヴィダ系のマラーヤラム語地域）でも、ガンディーがヒンディー語で始めた演説を、途中から英語に切り替えたという注記がある（『ハリジャン』1934年1月26日、日刊紙『ヒンドゥー』1月21日。スピーチそのものは1月18日に行われた）。この二つのスピーチにおいて、「自分は英語を愛している」とまで述べている。

もちろん、ガンディーは、ヒンディー語を「国語 (national language)」にすべきだということを理念として述べているだけではなく、その普及の実践面についても努力をしている。インドールで行われた「ヒンディー文学会議 (Hindi Sahitya Sammelan)」でのスピーチでは、南インドでのヒンディー語の普及がかなり進んでいることが示されている。たとえば、マドラスでは1931年から1935年までの間に70冊のヒンディー語の本が出版され、80万部も発行されたという。また、17年前（この団体が発足したとき）にはヒンディー語を教える学校は1校しかなかったのに、1935年には70のハイ・スクールで教えられているというデータを示している（1935年4月20日。『ヴィーナ』記念号1969年4-5月号所収。全集編集の段階で発見されたものかと思われる）。

1937年ごろから、ガンディーは「国語 (national language)」としてヒンディー語を選択すべきだという主張とともに、「地方語 (provincial language)」も大切にすべきだという主張へと収斂してきたように見える。これは南インドを含め、インド各地を巡り歩いた結果と考えてよいだろう。

4.4 一つの文字

地方語の尊重と、一見矛盾するようだが、ガンディーは「一つの文字」ということも強調し始めた。実際に独立を目前に控えて、サンスクリットに由来するデーヴァナーガリー文字とペルシャ・アラビア文字の対立が浮かびあがって来たときには、その二つの文字に対して両方とも認めるという立場に立つことになるが、その対立の構図が際立ってくる以前は、ガンディーは「一つの文字」という主張をしている。

この「一つの文字」を明確に述べたのは1927年7月14日付『ヤング・インディア』の「全インドに共通の文字を」である。そこでは、ガンディーは、ベンガリーやグジャラーティーのようなインド・アー

リア系の言語だけでなく、タミル語やマラヤーラム語、カンナダ語などのドラヴィダ語もデーヴァナーガリー文字を採用することによって、インド国内の諸言語が学びやすくなるとしている。その第一歩は、デーヴァナーガリー文字を、少なくともヒンドゥー教徒の学校では必修とし、諸言語の文学をデーヴァナーガリー文字で印刷せよと主張している。

だが、この発想は、かなり暴論に近いと言えるだろう。実は、以前、自分の主宰するグジャラート語紙『ナヴァジーヴァン』で、読者が『ナヴァジーヴァン』をデーヴァナーガリーのグジャラティー語で発行してはどうか、という意見を寄せたとき、ガンディーは「それを受け入れるつもりがない」と明確に述べていた。その理由は、読者が減る危険があるからというものだった。この雑誌は、広く読まれることが最も大切なので、デーヴァナーガリー文字に変えることによって読者を減らすというリスクは負いたくないというものである。ムスリムやパールシー教徒、女性などが読者の中におり、彼らがデーヴァナーガリー文字を学習するのは、不可能ではないにしても困難だろうというのだ。おそらく、ガンディーも人びとが文字に対する愛着を強く持っているということは、気がついていたのであろう。「唯一の国語 (national language)」に固執するガンディーとしては、そのためには文字の統一ということが筋道として見えていたものと考えられる。

一つのインド、一つの言語が必要だと考えるガンディーは、さらに、ペルシャ・アラビア文字に対しては極めて寛容な姿勢をとることになる。後に起こるヒンドゥー教徒とムスリムの血で血を洗うような対立抗争はまだ起こっていないものの、すでにヒンドゥー教徒とムスリムの対立は日に日に厳しいものになっていた。ガンディーのペルシャ・アラビア文字に対する寛容はそのような事態を反映していたと考えてよいだろう。

文字に関してはもう一つ、ローマ字を用いればヒンドゥー教徒にとってもムスリムにとっても中立なのではないか、という考え方があるが、ガンディーはそれに対してはまったく否定的である。ヒンドゥー教徒もムスリムも文字に敏感になっており、自分たちの文字を譲ろうとしない状況の中で、第三の道としてローマ字を用いるべきだとの考え方は「感情という点からも、科学的な観点からも」メリットはなく、せいぜい「印刷とタイプという目的のために便利なだけだ」と述べている（『ハリジャン』1939年2月11日）。ガンディーは、このような現状認識に立ち、次のような希望を述べている。

……お互いの気持ちが分断されている中で、ローマ字は、決して（ヒンドゥー教徒とムスリムの）両者を結びつけることはないだろう。それは、両者にとってさらなる負担になるだけだ。（デーヴァナーガリー文字とペルシャ・アラビア文字）の二つの文字を学ぶのが、「国語」の難問 (riddle) を解決するための最もたやすい道だ。そのことは、ヒンディー語とウルドゥー語の思想へとヒンドゥー教徒の男の子たちとムスリムの女の子たちを解放することになるだろ。彼らこそが未来の世代の大人の男と女となるのだ。（『ハリジャン』1940年3月16日）

1940年代に入ると、イギリスからの独立がいよいよ具体化し始め、ガンディーは明確にヒンドゥース

ターニー語という名称で「国語 (national language)」を構想するようになる。それは、「Hindi + Urdu = Hindustani」という形で示されたものである（『ハリジャン』1942年2月2日でこのような「式」が示された）。独立を目前にして、デーヴァナーガリー文字を譲ろうとしないヒンディー語派の動きは、パークスターンが分離独立しようとしている中で、ヒンドゥー教徒とムスリムの溝をますます深める働きをした。ガンディーは文字に関しては、究極的にはデーヴァナーガリー文字と考えていたが、性急にその実現を急ぐことがヒンドゥー教徒とムスリムの対立を煽るだけで、インドを分裂に導くだけだという信念をもっていた。この時期、ヒンドゥスターニー語を「国語 (national language)」にすべきだという論文やスピーチが数多く発表されている。憲法制定会議でどのようなやり取りがあったかについては、すでに先行研究がある²⁹⁾。ガンディーがその状況をどう捉えていたかについては、さらに丁寧に彼の発言を検討する必要がある。稿を改めて考えてみたい。一言だけ述べておけば、ガンディーはインドの憲法はヒンドゥスターニー語で書かれるべきだと明確に主張していた（『ハリジャン』1946年6月16日）。

5. おわりに

以上見てきたように、ガンディーは南アフリカにいたときから、「一つのインドに一つの言語」という信念を抱いていた。そして、その後、時局の中で微妙にニュアンスを変えながらも、最終的には「ヒンドゥスターニー語」をインドの単独の「国語 (national language)」にするべきであり、その文字は、当面はデーヴァナーガリーとペルシャ・アラビア文字の両者を許容するという内容であった。また、地域の言語（ガンディーの用語では「地方語 (provincial language)」については尊重するものの、文字はデーヴァナーガリー文字に変えるということであった。

英語に対しては、初期にはやや肯定的だったが、独立運動の渦中の人となつてからは、一貫して否定的であった。「自分は英語を否定するつもりはない」と何度も述べてはいるが、あくまでもそれはやむをえぬ場合に限っての使用を認める、あるいは、いやいやながら認めざるをえないというものだった。

だが、「実践の人」ガンディーは、果たして言語に関して自らの思想の通りに実践したのであろうか。確かに、ヒンドゥスターニー語を提唱してからは、ヒンドゥスターニー語による講演や著作が目立って多くなったといえるだろう。しかし、当初グジャラーティー語で刊行していた雑誌は、途中から英語のみで発行されることになった。会議派に対しては一般の人びとにことばが届かないと批判して、ヒンドゥスターニー語の使用を求めながら、自らの主宰する雑誌は、ヒンドゥスターニー語に変更することはなかった。とはいえ、そこにガンディーのご都合主義や、首尾一貫しない態度を見るというのは、的はずれであろう。ガンディーはおそらく、本気でヒンドゥスターニー語がインドを統一する唯一の言語だと考えていたのであろうし、英語を使うことには否定的だったのだろう。ただ、「実践の人」は、ヒンドゥスターニー語では自らの主張が広まらないことを十分認識しており、それゆえ、このような態度をとったものと考えられる。英語の圧倒的な力と、ヒンドゥスターニー語の非力を認識していたからこそ、ガンディーは英語で発信し続けたのだろう。

憲法の成立を見る前にガンディーは暗殺されてしまった。彼の構想した「国語 (national language)」は、憲法において実現しただろうか。残念ながら、1950年に発効した憲法の規定は「デーヴァナーガリー文字で書かれたヒンディー語を公用語 (official language) とする」というものとなった。ガンディーは、デーヴァナーガリー文字を唯一の文字とすべきだと主張していたから、その意味では彼の考えの通りになったとも言うだろう。しかし、ヒンドゥー教徒とムスリムの融和という、ガンディーのもう一つの信念からすれば、これは彼の望んだものではなかった。さらに、英語については、憲法施行後15年で公用語の地位を失うとしたものの、その後の法律でほぼ永久にその地位は失わないということになった。皮肉なことに、独立インドの憲法そのものが英語で書かれたのであった³⁰⁾。

註

- 1) 現在のインドの公用語がどのようになっているのかについては、拙著『あふれる言語、あふれる文字——インドの言語政策』(右文書院、2001年)で考察した。参照されたい。
- 2) 長崎暢子「イギリス統治のもたらしたもの」(辛島昇編『インド世界の歴史像』、山川出版社、1985年)にあるように、「創成期の国民会議のインド人メンバーのなかに核があるとすれば、それはインド人留学生たちのロンドン時代の交友関係であるとされる。フィーローズシャー・メヘター、バドルッディーン・タイヤブジー、W・C・ボネルジー、M・コーシュなどは一八六〇年代の後半にともにロンドンに滞在していた。やや遅れてきたS・パネルジー、R・C・ダットらも加えて、彼らは地域を超えた共感を抱き合い、ナオロージーの影響下に全インド的な政治組織を結成する下地をつくった。この組織は従来のような家族やカーストや地域を基盤にした組織と異なり、全インド的、初期ナショナリズム、すなわちイデオロギーを基盤とした組織であるという点が新しかった。」319頁。
- 3) ガンディーの生まれたグジャラートでは父親の名前をミドルネームとする、つまり、Karamchandは父親の名前である。「モーハーン」はクリシュナ神の別名であり、「魅惑するもの」の意味で、それに「仕える者」の意味の「ダース」がついたものだという。
- 4) 森本達雄『ガンディー』(「人類の知的遺産64」、講談社、1981年)137頁。
- 5) 17世紀はじめに、ムガル帝国の4代皇帝ジャハングール (Jahangir, 1569-1627) との交渉のためにインドを訪れた、サー・トーマス・ロウ (Sir Thomas Roe) の苦闘ぶりをはじめ、当時の状況に関しては、Cohn, Bernard S., *Colonialism and It's Forms of Knowledge*, Princeton University Press, 1996. に描かれている。
- 6) Young, G.M.(ed). (1935, rpt.1952). *Speeches by Lord Macaulay*. Oxford University Press.1935 (rpt.1952), p.359.
- 7) Krishnaswami, N.and Krishnaswami, L., *The Story of English in India*, Foundation Books, 2006, p.21.
- 8) 明治維新直後の日本でも同様なことがあった。森有礼が英語を日本の公用語にしようとしたということとは、とんでもない暴論としてしばしば話題とされるが、森がそう主張しなくてはならぬほど当時の

日本語の状況は深刻だった。森の主張は英語で発表されて、原典を踏まえずに議論されることが多いので、日本語訳をつけて解説を加えた『論争・英語が公用語になる日』（中公新書ラクレ編集部＋鈴木義里編 中央公論新社 2002 年）を参照。

- 9) 藤井毅「近現代インドの言語社会史」（小谷汪之編『現代南アジア 5 社会・文化・ジェンダー』東京大学出版会 2003 年）p.76.
- 10) 『ガンディー自叙伝 2』（田中敏雄訳・平凡社、2000 年）の訳者解説による（229 頁）。
- 11) 田中敏雄、前掲『ガンディー自叙伝 2』、229～30 頁。
- 12) グジャラーティー語版の日本語訳では「いくつかの科目」となっているが、英訳版では most subjects となっており、どの程度の割合で英語による授業が行われていたのかは調べる必要があるだろう。
- 13) 森本達雄、前掲『人類の知的遺産 64 ガンディー』57 頁。K. クリパラーニの『ガンディーの生涯（上）』（森本達雄訳、第三文明社、1983 年）33 頁の記述に基づくものか。
- 14) 原本は散逸しているようだが、1888 年 11 月 12 日という日付のものが、全集には収録されている。全集の注によれば、120 頁くらいあったとのことである。
- 15) 田中敏雄によれば、satyagraha は「satya（真理）への agraha（執拗な主張、固執）。本書（*Hind Swaraj* 引用者）執筆の時点で、ガンディーは、魂の力と説明している。運動では、平和的非暴力・不服従・非協力を意味する」。『真の独立への道（ヒンド・スワラージ）』（田中敏雄訳、岩波文庫 2001 年）159 頁。
- 16) ローラット法（Rowlatt Act）というのは俗称である。正式には「無政府・革命分子犯罪取締法（Anarchical and Revolutionary Crimes Act）」だが、そのもとになった 1917 年のインドの治安状況と対策を調査するために任命された委員会の委員長の名前にちなんで、通常こう呼ばれている。
- 17) このときの悲惨な状況については、ドミニク・ラピエール、ラリー・コリンズ『今夜、自由を』（杉辺利英訳、早川書房、1977 年）に詳しく描かれている。
- 18) ヴェド・メータ『ガンディーと使徒たち「偉大なる魂（マハトマ）」の神話と真実』（武市一幸訳、新評論、2004 年）62 頁。
- 19) ガンディーは「ヒンディー」「ヒンドウスターニー」という用語をかなりゆるやかな形で使っている。この言語名に関しては山根聡「インド文学史記述における言語の特定」（研究代表水野善文『多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として』2008 年）に詳しい。
- 20) ここでは national language をあえて「国語」と訳しておいた。「民族語」・「国民語」なども考えられるが、ガンディーの主張する national language は、「民族」という概念とは異なる。また、「一つのインド」を希求してやまなかったガンディーの「インド」は国家というのともやや異なっている。そこで、あえてあいまいな「国語」を採用した。
- 21) Das Gupta, Bidhu Bhusan, *Learn Hindi Yourself*, Das Gupta Prakashan, 1975.
- 22) マコーリとは、初代インド総督ベンティンク（William Henry Cavendish Bentinck）とともにイン

ドに渡って来たマコーレー (Thomas Babington Macaulay) のことである。すでに第2節で述べたように彼は、インド人の民衆に教育をすることは不可能であるが「血と色はインド人で、趣味、考え方、道徳、知性においては英国人である階級を作り出す」という方針のもとエリートに英語を教えることが必要であると説いた。

- 23) Orsini, Francesca, *The Hindi Public Sphere 1920-1940*, Oxford University Press, 2002, pp.138-9.
- 24) 中村平治『南アジア現代史1』(山川出版社、1977年) 82頁。
- 25) 中村平治、前掲書、82頁。
- 26) motherland の訳語として、ほとんどの辞書は「母国」を当てているが、「国」には国家というニュアンスを含むので、それを避けるために「母なる土地」とした。
- 27) バンキムチャンドラ・チャットパッドーエ (1838 - 94) の作曲した歌。「母を讃える」の意。インド国民会議の1896年の大会で歌われて以来、独立運動の中でしばしば歌われた。現在は、国歌 (Jana Gana Mana ラビンドラナート・タゴール作) と同様の地位を与えられている。ある年鑑は、「ジャナ・ガナ・マナ」を「国歌 (National Anthem)」、「バンデー・マータラム」を「国民の歌 (National Song)」だとしている (*Manorama Year Book* 2008)。
- 28) 「……ジー (ji)」は敬意を示すために人名や聖地、川の名などにつけられる接尾辞である。ガンディー主義者たちはもちろん、一般の人も「ガンディー・ジー」という呼び方をするところがある。「ガンディーさん」といった語感と考えられる。
- 29) 藤井毅「インド憲法制定過程における言語問題の推移」(I・II) (『アジア経済』1994年4月号・5月号)。
- 30) インド憲法は英語版を正本 (authoritative text) として1950年1月24日に憲法制定議会で可決された。ヒンディー語版が正文として認められたのは、1987年12月9日の第58次憲法改正においてであった。

参考・引用文献

- M. K. ガンディー 『ガンディー自叙伝』1, 2 (田中敏雄訳・原文: グジャラーティー語)
平凡社 2000年
- M. K. ガンディー 『真の独立への道 (ヒンド・スワラージ)』(田中敏雄訳・原文: グジャラーティー語)
岩波文庫 2001年
- K. クリパラーニ 『ガンディーの生涯』1, 2 (森本達雄訳) 第三文社 1983年
- 坂本徳松 『ガンジー』(人と思想) 清水書院 1969年
- 鈴木義里 『あふれる言語、あふれる文字——インドの言語政策』 右文書院 2001年
- ラクレ編集部+鈴木義里編 『論争・英語が公用語になる日』 中央公論新社 2002年
- 長崎暢子 「イギリス統治のもたらしたもの」 辛島昇 (編) 『インド世界の歴史像』(山川出版社) 所収
1985年
- 長崎暢子 『ガンディー——反近代の実験』 岩波書店 1996年

- 中村平治 『南アジア現代史』 山川出版社 1977年
- 藤井毅 「近現代インドの言語社会史」 小谷汪之(編)『現代南アジア5 社会・文化・ジェンダー』(東京大学出版会)所収 2003年
- ヴェド・メータ 『偉大なる魂(マハトマ)の神話と真実』(武市一幸訳)新評論 2004年
- 森本達雄 『人類の知的遺産64 ガーンディー』講談社 1981年
- 山根聡 「インド文学史記述における言語の特定」代表水野善文『多言語社会における文学の歴史的展開と現在:インド文学を事例として』所収 2008年
- D.ラピエール・L.コリンズ 『今夜、自由を』(杉辺利英訳)早川書房 1977年
- Chakrabarty, Bidyut *Mahatma Gandhi A Historical Biography* The Lotus Collection 2007
- Cohn, Bernard S, *Colonialism and It's Forms of Knowledge* Princeton University Press 1996
- Gandhi, M.K. *Collected Works of Mahatma Gandhi*
Ministry of Information and Broadcasting, Government of India 1961-1994
- Gandhi, M.K. *Our Language Problem* (Hingorani, A.T.ed.) Bharatiya Vidya Bhavan 1965
- Gupta, Das *Learn Hindi Yourself* Das Gupta Prakashan 1975
- Krishnaswami, N. and Krishnaswami, L. *The Story of English in India* Foundation Books 2006
- Orsini, Francesca *The Hindi Public Sphere 1920-1940* Oxford University Press 2002
- Young, G.M. (ed.) *Speeches by Lord Macaulay* Oxford University Press 1952 (1952)